

「過去との回復」 ～無意識にまかせていませんか？～

創42:2～9、21～28

予備校のCMの影響で「今でしょ！」が流行語になっています。たしかに私たちにとって今はとても大事です。過去に悪いことがあると、これからもそうかもしれないと将来を儚んだり希望をもてなかつたり人を信じることができなくなったりしてしまいます。私たちにとって過去はなかなか捨て去ることのできないものです。しかし、イエス様は私たちの過去の痛みや悲しみを消すために十字架にかかられました。今を生きるためには、過去に自分がどう間違っていたのかを理解する必要があります。でも、手品のようにパッと消されるものではありません。神さまは不可能を可能にされるお方なので、私たちの過去がどんなに悪くても必ず全てを益としてくださいます(ローマ8:28)。今を喜んで生きるためには、喜びを取り去っていた過去に目を向けて、きちんと向き合って処理しなければならないということです。過去を整理してとっておくのではなく捨てて今を生きましょう。(創42:2～9,21～28) ヨセフは父ヤコブに愛された母から生まれ、自身も父に愛されていたと高慢になっていました。自分が見た夢を臆することなく兄たちに話し、兄たちから疎まれる存在になりました。ヨセフは兄たちの策略で奴隷として売られました。そこでも強姦の濡れ衣を着せられて牢に入れられたりしました。でも最後には、王に認められてエジプトの大臣になりました。ヨセフは色々な問題にあった時に、正面からキチッと向き合ってきました。そこで色々な苦難の道を通りながらも大臣になることができました。そしてこのヨセフの元に食糧をもらうために兄たちがやってきます。この時、ヨセフは、今までのように逃げることをしませんでした。兄たちと正面から向き合ったのです。ヨセフが一番末の息子も連れてくるようにと言いますが、父ヤコブは何度も嫌がりました。ヤコブは過去の記憶に怯えていたのです。ヨセフがいなくなった時はカインとアベルの過去、ベニヤミンを連れて来いと言われた時は自分の過去(エサウとヤコブ)によって恐れが生じて正しい判断ができなくなってしまっていました。私たちは過去の恐れに根ざして色々と決断をしてしまいます。そしてこれを私たちは無意識にやっています。ヤコブはこれらのことを考えて決断していたでしょうか。私たちが熱いものを触った時、反射で手を離すのと同じように、ケンカをすると人のせい、感情的な発言、言い訳をする…など、心が痛い思いをしそうになった時反射的に無意識に同じようにやってしまうのです。入ってきた情報を過去の記憶に根ざして完全にマイナス処理をしてしまうのです。嫌になる、疲れるはずのない日常が、なぜか、あることを契機に疲れること、嫌なことになってしまうことはありませんか。ヤコブもそうでした。当時末っ子だった弟(ヨセフ)から離れて兄弟だけにしておくろくな事が起こらないと無意識に判断していました。ヨセフも同じです。何か起こる前には必ず何かある、予兆があると判断していました。だからヤコブやヨセフや旧約聖書に出てくる人物が正しく行動できたのは、嫌なことが起こる前ぶれが過去の傷から無意識に分かっていたので、それに対処して乗り越えていったのです。だけど逃げなかつただけで、決断を悪いところからしているのは事実です。神さまは、ヨセフの誕生もヤコブが傷つくことも計画において彼らが回復するプログラムも計画しています。ヨセフの生涯は棚ばたのようにコロッと変わったものではありません。ダビデも30年かかりました。ヨセフは何年も牢に入れられていました。それでも彼は「もういい！やめた！」腐らなかったのです。なぜならば、神さまを知っていたからです。神さまを知ってさえいれば腐ることはありません。私たちが何と正面から向かい合う必要があるかという、**①イエス様を通して自分と向き合う！**必要があります。(マル11:1・2,12～14,20～23) 1節のベテパゲの「パゲ」は「初なりのいちじく(4月)」と言う意味です。苦しい雨季の何も食べ物が無い時期を越えた5～7月にしか、いちじくはできません。そしてこの時期に採りたいいちじくは畑の持ち主のもので一般人は食べられません。だから一般人がいちじくが食べられるのは「パゲ」の時だけなのです。だから、イエス様が見たパゲの時に実を結ばないいちじくは本当の実も結ぶことができないと言われているのです。いちじくはイスラエルを象徴しています。イエス様はいちじくの本を呪いたくて呪ったわけではなく、このままだと今までのイスラエルのように本当の実が結べなくなることを伝えようとしていました。私たちも過去に縛られて古い情報を元に物事を処理していると実を实らさなければいけない時に実が実りません。初なりの実がならないと神さまが計画している本当の実もならずことができなくなります。ヨセフは神さまを通して過去と向かい合い、自分の悪かったこと、神さまがよくしてくれたことと向き合いました。ネガティブに捉えれば悲しい過去ですがヨセフはそうしませんでした。だから、神さまの前に出て自分と向かい合い、誰にも言えない過去の傷を神さまに少しずつ癒してもらいましょう。ですが、この癒しは1回で終わるものではありません。ですから**②イエス様と一緒に近道をしない！**で行きましょう。それぞれが苦しい道をたどるのは過去に問題があるからです。弟子たちも3年イエス様と行動を共にしましたが変わることができませんでした。この後聖霊さまにふれられてやっと変わることができました。昔の自分を思い出してください。すいぶん変わってきていると思います。しかし1回で全て変わったものではありません。痛みや悲しみは大きいので1回では完全にキレイにすることができません。だから神さまは全自動洗濯機のように少しずつ私たちにキレイにしてくださっているのです。だから近道をしてはいけません。そうするといつのまにかとてもキレイな真っ白な私たちになれています。そして、**③イエス様の恵みで関わる人に祝福を！**与えていきましょう。ヨセフは牢屋の中でみんなに祝福を与え続けてきました。自分に悪いことをしてくる人に良いことをしてお返ししていたのです。(マタ5:39～40) 祝福でしか私たちの道が開かれないからです。嫌な人でも感謝を捧げていきましょう。イエス様の御名によって祝福を祈りましょう。そうすれば過去の傷は癒されます。①～③のポイントはセットです。自分の汚さと向き合って、最短距離で癒そうとしないでイエス様と一緒に険しい道のりでも乗り越えて、その道すがらに得たイエス様からの恵みを自分に関わる人に流していきましょう。そうすれば、素晴らしい世界が広がり、楽しく過ごすことができます。(要約者：行司 佳世)